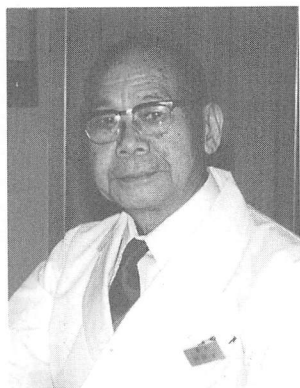


# 矢数道明先生を偲ぶ——その足跡

日本医史学会常任理事  
北里研究所東洋医学総合研究所

小曾戸 洋

漢方の第一人者であるとともに、つとに日本伝統医学の研究に情熱を注がれ、矢数医史学賞の基金を寄せられるなど、日本医史学会に多大な貢献をされた矢数道明先生が、去る平成十四年十月二十一日午後五時四十五分に、九十六歳の天寿を全うされた。私は二十五歳のとき矢数道明先生の門に入り、以来二十七年間、公私ともに先生のご愛顧を得、指導を受けてきたものである。先生は北里研究所東洋医学総合研究所の所長に就任されて医史学研究の部門を設置され、不肖私はその責任者の命を拝し、今日までその職を汚してきた。私のいまあるはまことに先生のお陰である。このような関係から、僭越ではあるが、ここに先生の略歴と業績の一端を記して、追悼の辞にかえたいと思う。



北里東医研所長退任を目前にして (昭和61年春)

先生は明治三十八年(一九〇五)十二月七日に茨城県那珂郡大宮町二二九の地に生誕。父は辰之介。母はすて。本名は四郎という。大正十三年(一九二四)三月、水戸商業学校を卒業。長兄の格かくの命により漢方を志し、昭和元年(一九二六)東京医学専門学校に入学し、同五年三月に卒業。東京下谷の一貫堂・森道伯と兄の格に師事して漢方を修得。この年、妻とりを娶った。翌六年一月、師の森道伯逝去。この年から号を道明と称した。

同八年(一九三三)五月、弟の有道(本名五郎)と四谷区簞笥町九四に温知堂医院を開設した。同十年、大塚敬節・木村長久・弟有道・清水藤太郎・

柳谷素靈・石原保秀とともに偕行学苑を組織し、拓殖大学に漢方講座を開講。同十三年には東亜医学協会を結成して機関誌『東亜医学』（戦後は『漢方の臨床』として現在も継続刊行中）を発刊した。同十五年七月には満州国民生部の招請により、漢方医学を法的に認めるか否かの会議に、日本漢方側の代表として竜野一雄とともに渡満、漢方の有用性を説いた。十六年八月、応召、陸軍に入隊。軍医として南方（フィリピン・ラバウル・ブーゲンビル島）に出征。同十七年九月、陸軍軍医少尉。現地の医療活動に挺身した。

戦後、同二十一年三月、復員帰国。弟有道は四月、中国華容鎮にて戦病死した。これより郷里の茨城県大宮町で兄格と漢方診療を行うこと五年。二十五年（一九五〇）三月には同志とともに日本東洋医学会を設立し、理事に就任した（同三十四年には理事長に就任。日本東洋医学会は平成三年に日本医学会の加盟学会となった）。翌二十六年十二月には東京都新宿区小川町二二〇に温知堂矢数医院を開設（現在地）。同二十九年十月、東京医科大学・薬理学教室（原三郎教授）に入室して漢薬烏頭附子の研究に着手。同三十四年二月に「東亜産烏頭・附子の薬理学的研究」によって同大学より医学博士号を取得した。

昭和四十三年には日本東洋医学会総会会長をつとめた。同四十七年六月、北里研究所に新設された東洋医学総合研究所の非常勤研究員となる。同五十四年（一九七九）九月、北里研究所東洋医学総合研究所副所長に就任。翌月十月十五日の大塚敬節同研究所所長の逝去にともない、東洋医学総合研究所所長に就任。また（財）日本漢方医学研究所理事長に就任した。同月、日本医師会最高優功賞を受けた。同五十六年三月、「日本における後世派医学史の研究―曲直瀬道三およびその学統」の論文により慶応義塾大学より文学博士の学位を授与された。先生は漢方薬の研究により医学博士号を得、医学研究によって文学博士号を得られることになったのである。同年五月には東洋医学に対する功績が認められ文部大臣賞を受賞した。同五十七年四月には日本全国にある東洋医学の研究施設に呼びかけ、日本東洋医学研究機関連絡協議会を発足し、会長に就任した。同月、北里東医研に小曾戸洋を採用し、医学研究の部署を作り、漢方医学史研

究を推進するよう事にあたらせた。十月には中国河南省南陽で開催された張仲景學說研究会に日本団团长として訪中。翌五十八年九月、門人会の温知会では先生の喜寿を祝って『矢数道明先生喜寿記念文集』の大冊を発刊。国内外の名士より多数の稿が寄せられた。翌五十九年には、大塚敬節とともに五年の歳月をかけて監修出版を行ってきた『近世漢方医学書集成』（名著出版、全二一六冊）の一大叢書の刊行事業が完結した。

昭和六十年（一九八五）十月、第四回国際東洋医学学会（京都）名誉会頭。翌六十一年三月、日本東洋医学研究機関連絡協議会名誉会長。同年七月、北里研究所東洋医学総合研究所所長の職を在任五年十ヶ月にして勇退されて名誉所長となり、跡を大塚恭男氏に譲った（ただし、外来診療は昭和六十三年三月まで続けられた）。このとき、「漢方、後より興こる機関にこれを伝えよ」と委託された名古屋浅井家の遺品の数々を北里東医研医史学研究所に寄託された。

先生は北里東医研所長退職の翌年の昭和六十二年、その退職金を医史学の振興に充てることを決意され、金五百万円を日本医史学会に寄付された。本学会はこれを受けて矢数医史学賞の規定を作成し、同六十三年度に論文（業績）の公募を行い、翌平成元年に第一回の授賞を実施することとなった。当初の案では先生の専門研究分野を考慮し、主に東アジアに発達した伝統医学の歴史研究を対象とすることも検討されたが、学問全体の振興を視野に入れ、その枠は外し、広く医史学研究の優れた業績を対象とすることになった。昭和六十三年からは本学会の賞として日本医史学会学術奨励賞が併設されたことにともない、矢数賞は主として単行本を対象とし、学術奨励賞は本学会誌の論文を対象とするよう方針化され、今日に至っている。これが矢数医史学賞発足の経緯である。矢数賞発足の昭和六十三年第八十九回日本医史学会総会（新潟）には先生は体調を損われ、八月には北里研究所病院病棟に一ヶ月間入院されたが、以後順調に健康を回復され、このたび老衰で逝去されるまで、なお十四年間、漢方界の最重鎮としていささかも気力衰えることなく活躍を続けられ、後学に範を垂れられたのであった。

先生は生前、文字どおり等身大あるいはそれ以上の著書をものされた。代表的なものだけを挙げてお次のようなもの

がある。『漢方医学処方解説』（日本漢方医学会・昭15）、『漢方診療の実際』（共著・南山堂・昭16初版・昭29増補版）、『漢方後世要方解説』（東洋医学社、昭29、医道の日本社・昭34増補版）、『漢方治療百話』（医道の日本社・第一集昭35・第二集昭40・第三集昭46・第四集昭50・第五集昭55・第六集昭60・第七集平2・第八集平7）、『漢方処方解説』（創元社・昭41）、『漢方診療医典』（共著・南山堂・昭44）、『ブーゲンビル島第七六兵站病院の記録』（医道の日本社・昭50）、『明治一一〇年・漢方医学の変遷と将来—漢方略史年表』（春陽堂・昭54、以後続編あり）、『近世漢方医学史』（名著出版・昭57）。

先生は先哲医家の顕彰にはとりわけ心を注がれた。曲道瀨道三・浅田宗伯・浅井家・山田業広・森立之・尾台榕堂・今村了庵、そして大塚敬節など、先生の先学に対する敬慕の情熱はいつもあくことなく、次から次へとその顕彰事業を企て、実行に移された。詳細はここに書き切れない。

先生の医史学に関する研究の軌跡と成果は、先生自身が本『日本医史学雑誌』三十四巻・三号（昭63）に「医史学と私」と題して詳細にお書きになっておられる。昭和三年、富士川游先生との出会いから筆を起こして、昭和六十三年まで余すところがない。本雑誌が矢部一郎編集委員長だった頃、編集委員の私が先生に直接お願いし、お忙しい最中、無理を押し、執筆されていたときの情景が昨日の出来事のごとく想い出される。

以上、先生を失った虚脱感のさめやらぬまま、命じられるまま倉卒に記した。先生の業績は余りにも多い。遺漏は免れまい。過去の記録にはとりわけ几帳面だった先生の天界からのお叱りの声が聞こえるようである。

先生。いづれあの世でまたお仕えしたく存じます。それまでしばらくおいとま申し上げます。

（平成十四年十一月二十日）